2022.02.20　七里教会　　最上光宏

「互いに足を洗い合え」　　ヨハネによる福音書 13:1-15

昨年 4 月から、ヨハネによる福音書を中心に学んでまいりました。この福音書は、13 章から 19 章まで、7 章に亘って、イエスさまの地上の生涯の最後の一日のことを記しているのです。なんとこの福音書の 3 分の 1 が、イエスさまの最後の一日のことに費(つい)やされているのです。このことは、この福音書の記者が、如何にイエスさまの苦難と死と、復活に強調点を置いているかということを意味しております。

今日の 13 章に記されている出来事は、イエスさまが弟子たちの足を洗われたという、有名な「洗足の物語」です。教会歴では、受難週の木曜日(今年は 4 月 14 日になります)を「洗足の木曜日」と呼んで、このイエスさまが弟子たちの足を洗われたことを記念することになっています。教会によっては、この日「洗足式」といって、教会員同士が互いに足を洗い合う儀式を行います。

イエスさまは、いよいよ今夜捕らえられ、明朝には十字架にかけられるという夜、弟子たちと共に「最後の晩餐」をなさり、その席で弟子たちの足を洗われたのです。4 節を見ると、イエスさまは**「食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいで拭き始められた」**と記されています。ここには、イエスさまのなさったことが、ずいぶん詳しく細かに記されています。イエスさまのなさった突然の行為が、よほど弟子たちの心に強い印象を与えたのでしょう。足は、体の中で一番汚れた部分です。当時は、土埃の中、素足でサンダルのような履物で歩くわけですから、ほこりと泥にまみれています。その足を洗うという行為は、普通、奴隷が自分の主人や、主人の大事な客に対して行う行為でした。それをイエスさまが、弟子たちに対して為したのですから、弟子たちの驚きは普通ではなかったと思います。シモン・ペトロは、思わず足を引っ込めて**「わたしの足など、決して洗わないでください」**(8 節)と叫んだとありますが、その気持ちはよく分かります。

イエスさまは、食事の最中に、なぜこのような突拍子もないことをなさったのでしょう。この 1 節には**「イエスは、この世から父のもとへ移るご自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」**とあります。「ご自分の時」とは、前々からイエスさまが神さまから示された時として自覚され、その時に向かって備え、歩んできた時です。イエスさまはこの時を、ご自身の「栄光を現わす時」と語っておられましたが、それはご自分が捕らえられ、十字架に磔にされる時を意味しておりました。その時がいよいよ来たのです。この最期の時を前にして、イエスさまが一番強く思ったことは、後に遺される弟子たちのことだったのです。その思いが、「世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」という言葉で表されているのです。

死を前にして、一番つらく悲しいことは、愛する者との別れです。いくら死んだ後、天国でまた会えると頭では分かっていても、死別ほどつらく悲しいことはありません。「弟子たちを愛し、愛し抜かれた」という言葉は、前の口語訳聖書では「世にいる自分の者たちを愛して、彼らを最後まで愛し通された」と訳され、新しく出た聖書協会訳も「最後まで愛し抜かれた」となっています。けれども昔の文語訳聖書では、「極みまでこれを愛し給へり」となっています。これは、愛の極限まで愛し抜かれた、ということです。この方が、イエスさまの思いをよく表しているように思います。　イエスさまが弟子たちと共に歩まれた年月は、わずか 3 年ほどの短い期間でしたが、寝食を共にし、共に神の国の福音にあずかり、それを宣べ伝えるために労苦を共にした弟子たちとの交わりは、イエスさまにとって貴重なものであったのです。このイエスさまの「極みまで愛された」弟子たちの中には、イエスを裏切ろうとしていたイスカリオテのユダも含まれていましたが、イエスさまはそのことを承知の上で、彼らを等しく愛され、一人一人の泥にまみれた足を、心を込めて洗われたのです。

「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださるのですか」(6 節)。驚いて尋ねたペトロに主イエス答えられました。**「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」**(7 節)と。この「後で」という言葉は、漠然とした「のちほど」という意味ではなく、「十字架の死と復活を通して」という意味です。つまりイエスさまが、弟子たちの足を洗われた行為は、単に「仕える」という愛の証しであるだけではなく、彼らの汚れ、弱さや過ちを、贖い清めるということを意味していたのです。そのことは、今理解できなくても、「後で(十字架の死と復活を通して)分かるようになる」ということでした。

「わたしの足など、決して洗わないでください」と恐縮して足を引込めようとするペトロに、主イエスは言われました。**「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」**(8 節)と。イエスさまの「洗足」の行為は、イエスさまの「極みまでの愛」のしるしでした。ペトロにとっては、恐れ多いという遠慮の積りであったかも知れませんが、これを断り、受けないということは、イエスさまの愛を受け入れないということであり、イエスさまの命を懸けた十字架の愛を無にするということになるのです。人と人との関係においても、遠慮や謙遜は、時によっては相手の好意を無にして、相手との関係を疎遠にしてしまう場合があります。相手の愛の好意は、遠慮すべきものではなく、感謝をもって素直に受け入れるということが、相手の真実な思いに応え、お互いの関係を深める絆となるのです。

「もし、わたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」。主イエスのこの言葉に、ペトロはあわてて、**「主よ、足だけではなく、手も頭も」**と言い直したのです。その時、主イエスは、**「既に体を洗った者は、全身清いのだから、足だけ洗えばよい」**(10 節)と言われたのです。「既に体を洗った者」とは、洗礼(バ

プテスマ)を受けた者ということでしょう。一度洗礼を受けた者は、もう一度受け直す必要はないのです。洗礼は一度限りのものです。勿論私たちは洗礼を受けても、過ちや罪を犯します。しかし私たちはその都度、かつて洗礼を受けて罪赦されたその恵みに立ち帰って悔い改め、主の赦しによって、新たな歩みを為すことが許されているのです。「足だけ洗えばよい」とは、「いつでも悔い改めて、主に立ち帰れ」という主の招きの言葉のように思われます。

ユダはこの後、イエスを裏切り祭司長たちに売り渡してしまうような過ちを犯します。ペトロはまた、イエスが捕らえられた後、3 度も「イエスを知らない」と言って、主イエスの愛を裏切ってしまいます。イエスさまは、そのことを見越しつつ、彼らの汚れた足を丁寧に洗われ、「極みまでの愛」を示されたのです。それは、彼らが十字架の血潮によって洗い清められ、新しく生きるための備えでもあったのです。

イエスさまは、弟子たちみんなの足を洗い終わった後、上着を着て、再び席について言われました。**「わたしがあなた方にしたことが分かるか」**(12 節)と。そして 14 節でこう言われたのです。**「ところで、主であり、師であるわたしがあなた方の足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。わたしがあなたがたにした通りに、あなたがたもするように、模範を示したのである」**(14-15 節)と。ここでイエスさまが語られた言葉は、弟子たちの足を洗われたもう一つの意味についてです。それはイエスさまがなさった愛の業を、弟子たちが互いに、模範として行うように、ということです。イエスさまからの愛を受けた者は、その愛と恵みのうちに留まるだけではなく、その恵みと愛に応えて、他者を愛し、他者のために生きる責任があるということです。イエスさまはこの先の 34 節で、「新しい掟」として**「互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」**と命じておられます。私たちは、ただ「愛し合え」という命令だけで愛し合えるものではありません。自分の内に「愛」が宿ってなければ、いくら命令されても、人を心から愛せるものではありません。しかし、そのような人を愛せない惨めな私たちが、あるがままでより大きな愛に包まれ、受け入れられていることを知る時、私たちの内に他者への愛が目覚め、相手を受け入れ、共に生きようという思いへと導かれるのです。「互いに愛し合いなさい」という戒めは、「わたしがあなたがたを愛したように」という、イエスさまの愛が私たちに注がれていることによって、開かれる道なのです。それにしても私たちは、イエスさまが私たちを愛してくださったのと同じようには、とても隣人を愛することは出来ません。いわんや、他人の罪を贖うなどということは出来るはずもありません。イエスさまは、そういうことを私たちに要求しているわけではありません。私たちはイエスさまと同じようにはできませんが、イエスさまの愛に応えて、それに倣うことならできます。「学ぶ」という言葉は「真似る」を意味する「まねび」という言葉からきていると言われます。イエスさまがなさったことを

「模範」として真似ることが、学ぶことなのです。それが「主に従う」私たちキリスト者の生き方なのです。

ひとの汚れた「足を洗う」ということは、だれもがやりたがらない嫌なことです。だから、昔は身分の低い奴隷にやらせていたわけです。しかし、その誰もやりたがらない嫌なことを、「主」であり「師」であるイエスさまが自ら進んでなさって「極みまでの愛」を示されたのです。それは、弟子たちが互いに愛し合い、仕え合うためであり、この世にあって、互いに仕え合うようになるためです。教会は、互いに愛し合い、互いに仕え合う共同体です。そしてこの世に愛をもって仕える群れなのです。

最近、いろいろな職場や組織の中で「パワハラ(パワーハラスメント)」が問題になっています。つまり、力のある強い立場にある者が、力のない弱い立場の者を力で支配し、弱い立場にある者の自由や権利を踏みにじったり、不快な思いをさせたりするようなことです。これは本当に残念なことですが、教団という組織の中にもあることですし、神学校や、あちこちの教会の中でも問題になっていることでもあります。本来、上に立つ権威は、神によって立てられた者として、謙虚に神に従い、人々に仕える僕(しもべ)にならなければならないのですが、しばしば自己を絶対化して、横暴に振舞い、弱い立場の人たちを無視したり傷つけてしまうようなことがあるのです。このような間違った「権威主義」は、少なくともキリスト教界にあってはならないことです。

教会の首(かしら)はあくまでもキリストであり、そのキリストが僕(しもべ)(奴隷)となって、私たちの足を洗ってくださったからです。牧師も信徒も共にキリストに仕える僕として、互いに謙虚に足を洗い合う、そういう主にある交わりを共に築き上げていくことが、私たちに求められていることではないかと思います。

イエスさまは、弟子たちが「誰が一番か」と、言い争う様子を見てこう言われたことがあります。「異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたたちの間では、そうではない。あなたがたの中で、偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、一番上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである」(マルコ 10:42-45)。

教会はこの世にあって本当に小さな群れですが、イエス・キリストの限りない「極みまでの愛」を受けている群れとして、この世に仕え、「地の塩」「世の光」としての使命を果たしていくものでありたいと願います。

「主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない」。互いに足を洗い合いましょう。　　アーメン